文學部東洋史研究室の所藏に歸して居るトルコ文の摩尼教文書である。文字は所謂ウイグル文字を用ゐ、五行づゝ朱と墨とで書き別けてある。ABの二枚を存してゐるが、恐らくこの二枚は原本に於て連接した一枚の左右であつたものであらう。内容は摩尼教徒であつたウイグル人の官號・人名及びその中の或人については出生地をも列記し、終りに此の人々に對する神の擁護を希請した祈願文であつて、一枚の最後の行は mani burγan 卽ち摩尼神といふ語を以て了つて居る。詳細なる解釋や論證は別の機會に讓らねばならないが、こゝに注意して置かなければならぬことは、その中の四人について記されて居る三つの出生地である。卽ち一人は qamlγ (Qamul 又は Qamil の人)、二人は sulmily 或は solmily (Sulmï 又は Solmï の人)、他の一人は küsänlig (Küsän の人) と記されて居る。こゝに küsän と見えて居るのは前記ミュラー氏が kuišan, küšän, kuisan, küsän と讀んだものと同一地名であることは疑無い。第一綴の母音が ui でなくして ü でなければならぬことは語尾に lig と記されて居ることから明らかなことであり、從つて第二綴の母音は a でなくして ä であることといふまでもない。第二綴の頭音はミュラー氏の文書には s とも書かれ、また s とも書かれて居るのであるが、この文書には s と書かれてある。それでミュラー氏が四種の讀み方を示して居る中 küsän と讀むのが正しかるべきことは、この文書に記されて居る所と照合して殆んど疑無いと信ずる。Sulmï, Solmï といふ地名は從來譯述された新疆出土のトルコ文書には見えてゐないやうであるが、然もミュラー氏が譯述した前記三文書中の第二にはその斷片の最後に üč sulmida といふ語が見え、氏はこれを Drei Sulmida と譯して居る。しかしこれは Sulmï が地名で -da は場所格 (locative) の接尾語であること疑無い。殘る一つの qaml は勿論 Qamul, Qamil の何れかで今の哈密に當る名である。

大月氏及び貴霜に就いて